

慶、汝等如きの下に居やうや、奇怪千萬、ナ、何を小癩な」

「乗物止め」

「ハ、ーツ」

御駕籠の引戸をがらりと開けますと、中より麻の上下に提げ刀で

「コリヤ其方は亂心者と相見える、予が此處にて手討に致すから左様に心得よ」

「ア、モン、暫らくお待ち下されませ、決して私は亂心者でも何でもござりません、御覽なざる通り、この肩の瘤があのような事を申しましたのでござります、御手討にしようと思しやるのも御有理でござります、晝間なれば兎も角も、

夜分の事でもござりますので、何卒お慈悲に御見遁し下されて、お助けを願ひます」

「イヤ晝間なれば可いが、夜分のことぢやに依つて了間

大阪高津表門筋

(薬) 價

効逆上を引下げ便通をよくし

半湯分廿五錢 三週分一圓卅錢

能ばい毒りん病諸毒を下す

一週分五十錢 五週分一圓

△送料十錢 海外四十二錢

効能で賣れる

「ニセモノ」あり御注意



ひよ子の

本家七ふくや伊藤長兵衛

九二七南電・三七九阪替振

することは相ならぬ」

「ヘエー、それは又何故でござります」

「されば、夜のこぶは見遁しならぬのぢや」



上方はなしリレー放談 (4)

上方落語談義

正岡容

よく取り上げられる問題であるが、文樂を除いては上方の藝界ほど、イザ亡びるとなると他愛なく亡びだしていつてしまふものはない。一度支那の軍隊は白熱化してゐるときはとても強いが、例へば閩北の一角が敗れたと聞くと忽ち總崩れになつてしまふかのごときものである。

一昨年あたりのこの雑誌へ掲載された上方の講釋師の番附を見たときも痛感したし、落語についてもじつにしばしば私はそのことをかんにてゐる。あの番附に網羅されてゐた夥しい講釋師が、いくら時世にあはないからとて、旭堂南陵と神田小伯山たつた二人になつてしまふのはひどすぎる。なめくじへ鹽を掛けたのぢやあるまいし。亡びると云つたとて、あゝキレイに亡びられるものではない。尤もいまの古今亭しん生の貧窮時代、彼が本所業平橋の陋屋に燻つてゐたときのなめくじは仲々頑健で、鹽をぶつかけるとそのたんびピユツと首を振つてその鹽を除かしてしまつた